

〈論 文〉

相談援助実習を履修した学生の 意識調査についての一考察

——学生の変化に着目して——

近 藤 真 由 子

はじめに

福祉ニーズの拡大と複雑化に伴い、社会福祉士にはより広い専門的力量⁽¹⁾が求められるようになっている。2007年の「社会福祉士及び介護福祉士法」改正において、社会福祉士の役割として「福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者（第四十七条において「福祉サービス関係者等」という。）との連絡及び調整」が追加⁽²⁾され、総合的かつ包括的な援助を展開する役割が法律上明確になった。こうした社会福祉士の社会的期待が高まる中、相談援助実習も充実化が図られている。

相談援助実習（以下、「実習」）では、当然ながら社会福祉士としての専門性を身につけることが目標となるが、学生にとってはソーシャルワークを学ぶことだけにとどまらない多様な体験をすることとなる。大きな不安を持ちながらも初めての体験や人との出会いのなかで、実習により何らかの影響や変化があったのではないかと推察できる。このような関心のもと実習を終えた学生へのアンケート調査を行った。この結果から実習生の意識や理解感を探り、学生理解のための手がかりとする。さらに、ソーシャルワークの視点から学生の実習体験による意識の変化がどのような意味を持つのかを考察することとする。

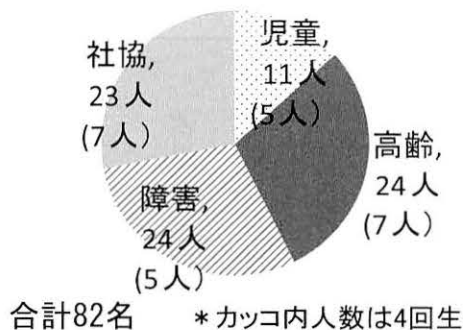
1. 実習生アンケート調査の概要

1) 調査の対象と方法

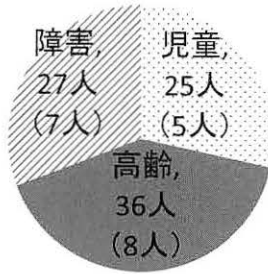
社会福祉士受験資格を得るための実習に参加した龍谷大学の学生⁽³⁾179名を対象とした。実習後

の経費申請時（2013年12月から2014年1月）において実習後の学生に対してアンケート調査を行い、170人から回答が得られた。但し、3回生が126名（地域福祉学科58名・臨床福祉学科68名）、4回生が44名（地域福祉学科24名・臨床福祉学科20名）である。9名（地域福祉学科7名・臨床福祉学科2名）については、実習不参加又は実習に参加したが無回答または未提出であった。170名の配属先内訳は以下の通りである。地域福祉学科のみが、社会福祉協議会を希望することができる。児童分野では児童養護施設・母子生活支援施設・児童自立支援施設・知的障害児施設・情緒障害児短期治療施設、高齢分野では特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、老人デイサービスセンター・地域包括支援センター・介護老人保健施設、障害分野では、入所施設、授産所などの通所施設、医療型障害児入所施設、救護施設が実習先となっている。

地域福祉学科 配属内訳



臨床福祉学科 配属内訳



合計88名 *カッコ内人数は4回生

以下では今回の「実習後アンケート調査」並びに9月に実施した「実習前アンケート調査」の一部⁽⁴⁾を参考に結果を報告する。但し、今回回答を得られなかった9名については対象外とした。

また、昨年実習を終えた4回生に対して「実習後アンケート調査」実施前にインタビュー⁽⁵⁾を行った結果、項目によって配属分野による相違があるとの仮説をたて、配属分野ごとのデータ分析を行った。

2) 調査内容

実習後アンケート調査の主な内容は、「ソーシャルワークについて」・「実習での学び」・「実習先での人間関係」・「実習指導室の利用状況について」・「実習全般を振り返って」・「卒業後の進路について」である。

3) 倫理的配慮

アンケートは、実習に関する事柄や考えについ

て聞くことを目的としており、成績等に一切影響を与えるものではないことを学生に説明し協力を得た。回答は統計的に処理し個人や施設が特定することができないよう配慮した。

2. 実習生アンケート調査結果

1) ソーシャルワークについて

〈各援助項目とソーシャルワーク〉

社会福祉士を目指すための実習は、ソーシャルワークの実践を体得することが大きな目標の一つである。ソーシャルワークを理解する上で、多様な実習項目が用意されている。それらの実習項目とソーシャルワークの関係性をどのように学生は捉えているのかを知るために14項目について、「ソーシャルワークを実施する上でどの程度必要だと思いますか」という質問をしたところ、それぞれ分野ごとに以下のような結果であった。また別途、必要度が増したかどうかを見るための変化⁽⁶⁾も合わせて参考とした。本稿では、実習前と後で各分野ごとに、どのような傾向になったかを視覚的に比較しやすいようグラフで示した(図1-1～図1-14)。左が実習前の結果、右が実習後の結果である。(すべて n=170)

①(図1-1) 実習前後とも大きな変わりはなく、「必要」であると考える学生が多数であった。

②(図1-2) 高齡分野において、他分野より若干、実習後「必要」であると答える学生が増加した。

③(図1-3) 児童分野で「必要」が増加した。一見高齡では実習前後で顕著な違いはないが、その内訳は必要度が増した学生19名、減少した学生

図1-1 ①日常的な対象者との言語・非言語コミュニケーション

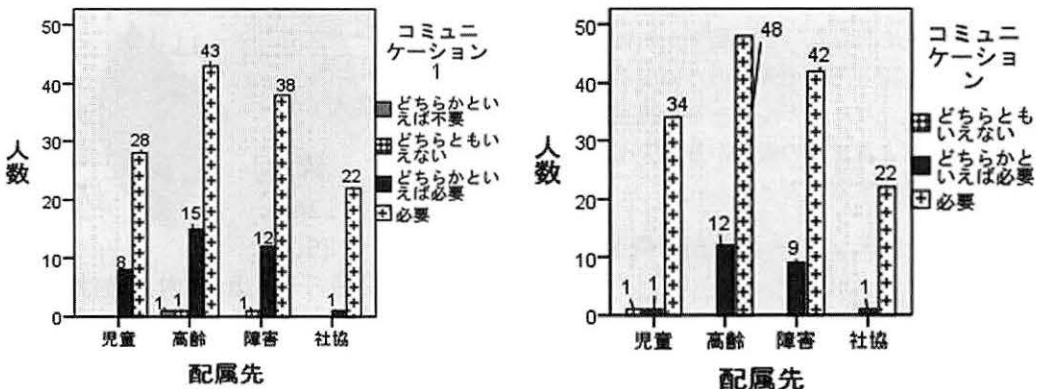


図 1-2 ②排泄・入浴・食事等の対象者への身体

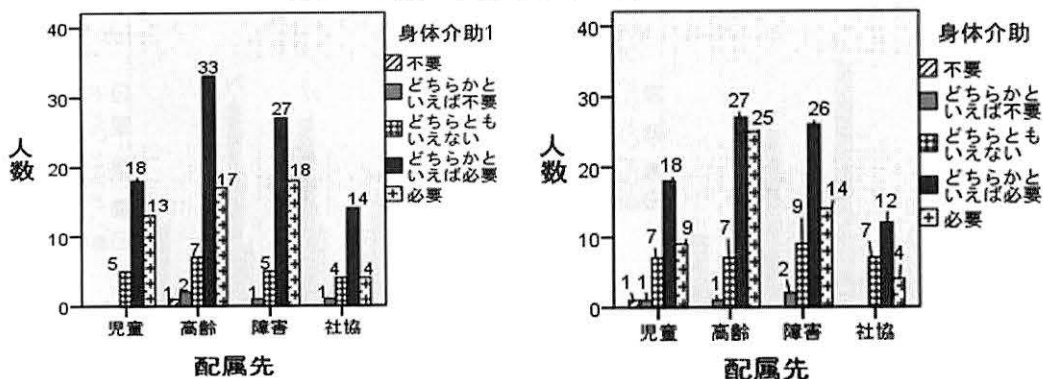


図 1-3 ③対象者の生活への掃除・洗濯等の家事援助

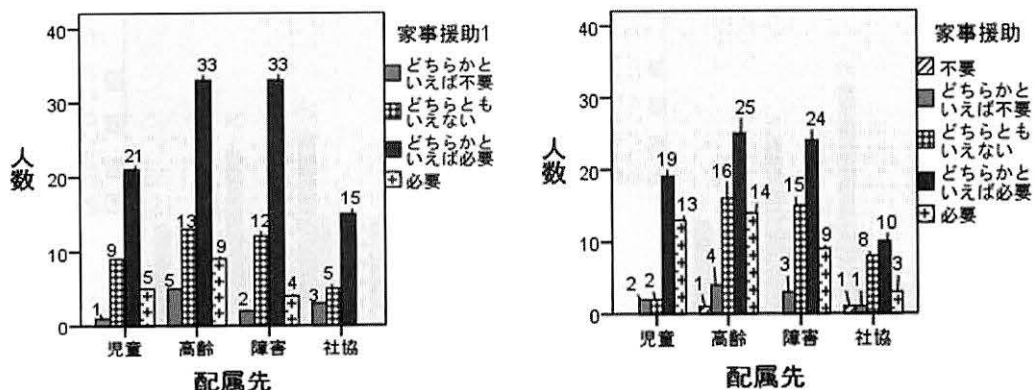
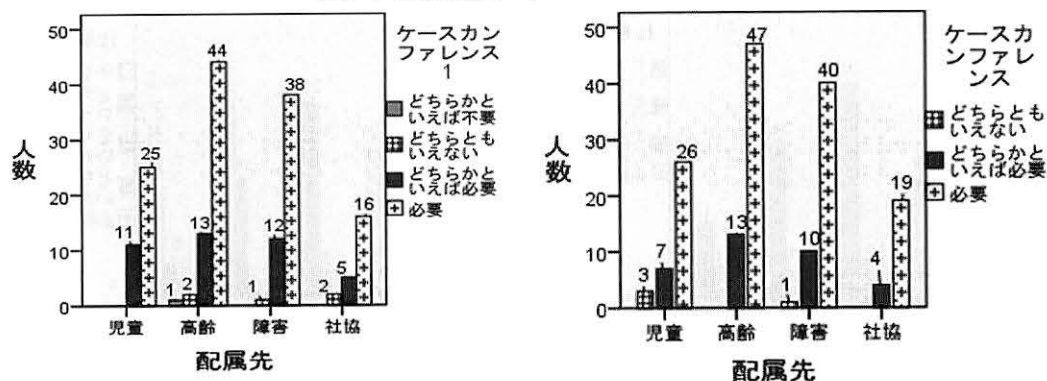


図 1-4 ④他職種とのケースカンファレンス



17名であった。障害分野も必要度が増した学生12名、減少した学生13名で同程度いた。

④(図1-4) 実習前後で顕著な変化は見られず、一貫して必要と感じている学生が多い。

⑤(図1-5) 全体として大きな変化がみられないが、障害分野の内訳をみると必要度増17名、変

化なし14名、必要度減少が15名であった。同じ障害分野だが感じ方のばらつきが出た。

⑥(図1-6) 児童分野で、必要度増が17名・必要度減が6名、高齢分野では必要度増が18名・必要度減が15名・27名が変化なしである。障害分野では、必要度増が19名・必要度減が13名・変

図 1-5 ⑤ ボランティアの指導

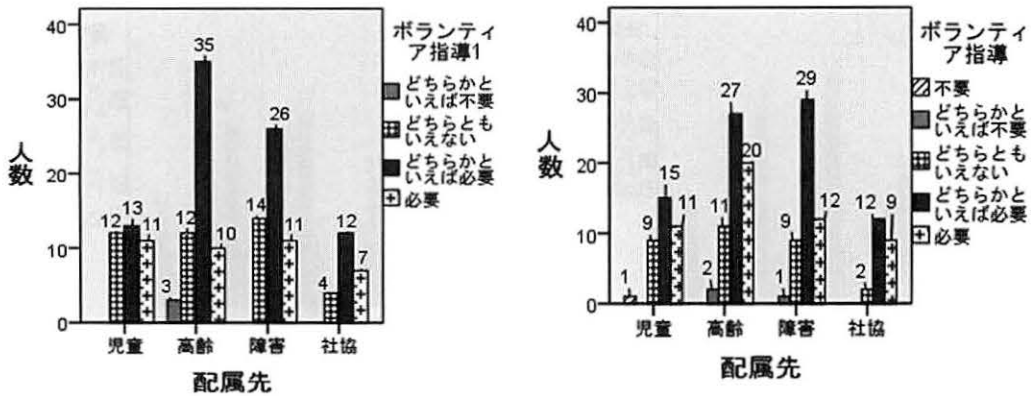


図 1-6 ⑥ 対象者のケアパッケージの作成

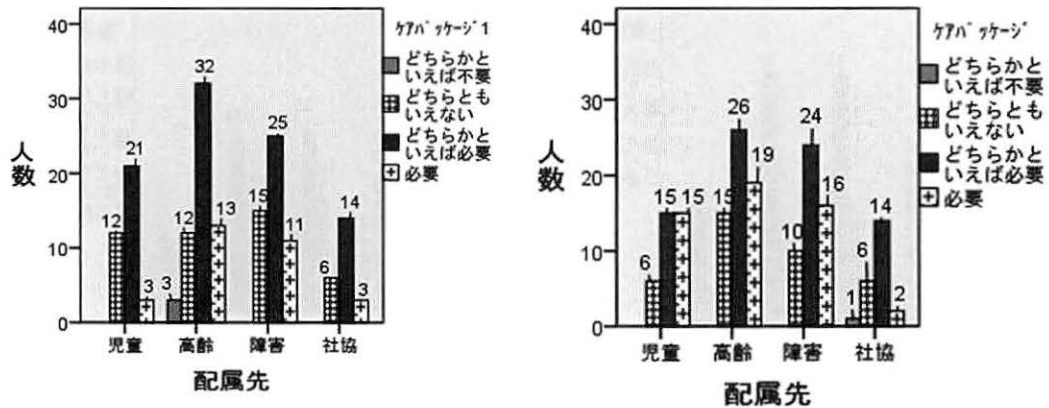
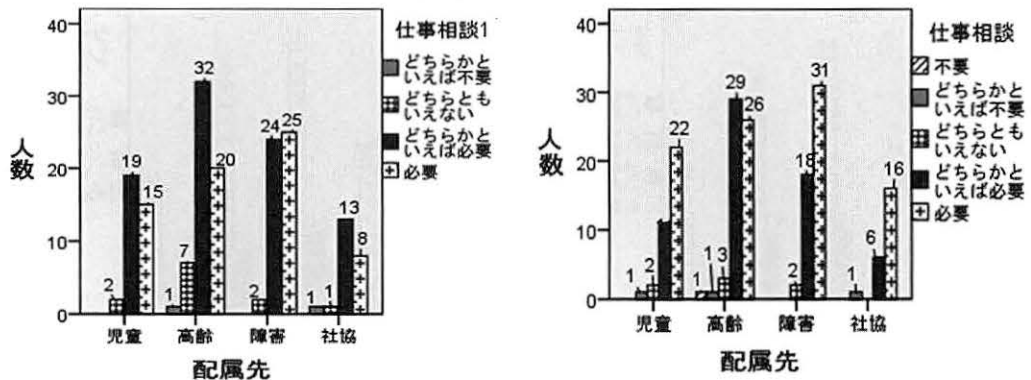


図 1-7 ⑦ 同僚の仕事上の相談に応じる



化なしが18名である。社協では必要度増が4名・必要度減が6名・変化なしが13名であった。

⑦(図1-7) 全体的に、若干必要度が増している。

⑧(図1-8) 全体的に、若干必要度が増している。

⑨(図1-9) 障害分野で、若干必要度が減少している。必要度増が9名に対し必要度減が17名で

あった。

⑩(図1-10) 各分野とも実習前後とも必要の傾向が高かったが、特に児童分野で必要度が顕著に増している。内訳は、必要度減が2名に対し必要度増が15名である。

⑪(図1-11) 社協分野では、必要度が減少した学

図 1-8 ⑧対象者の家族との面談

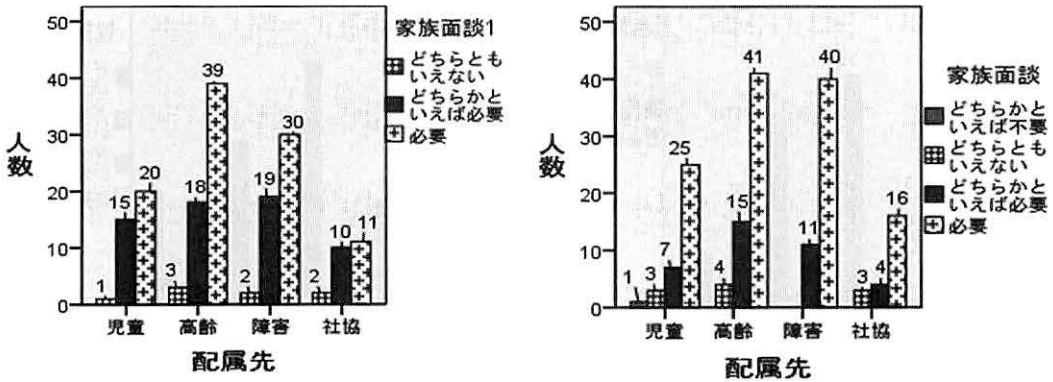


図 1-9 ⑨対象者の日中の作業・リクリエーション等の支援

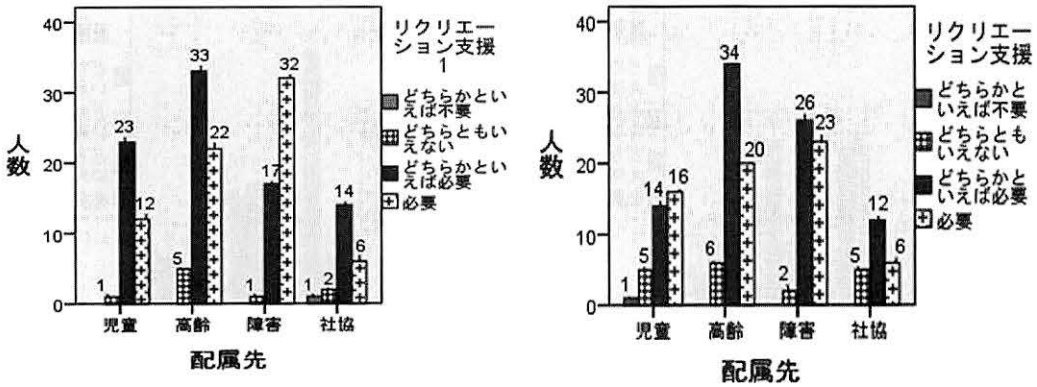
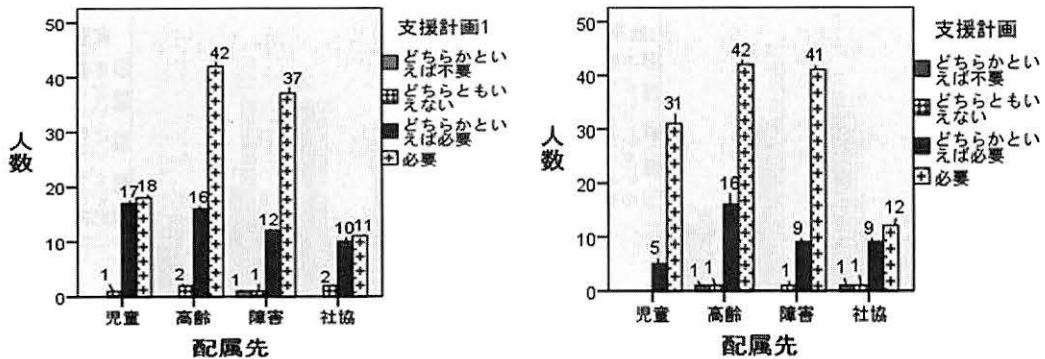


図 1-10 ⑩対象者の支援計画の作成



生はおらず、全体的に若干必要度が増加している。

⑫(図 1-12) 児童分野では必要度が増加した学生が 17 名(減少は 4 名)いた、高齢も必要度が増加した学生が 24 名(減少は 9 名)おり両分野とも実習後の必要度が増した。一方障害では必要度

が増加した学生が 12 名いるものの減少した学生が 14 名おり、やや必要度が下がった。

⑬(図 1-13) 児童分野で、必要度増が 13 名・必要度減が 7 名、高齢・障害・社協分野では必要度増加と減少がそれぞれ、「17 名・16 名」、「13 名・16 名」、「4 名・7 名」であった。そのほかは変

図 1-11 ⑪住民に向けての相談・講座等の準備・実施

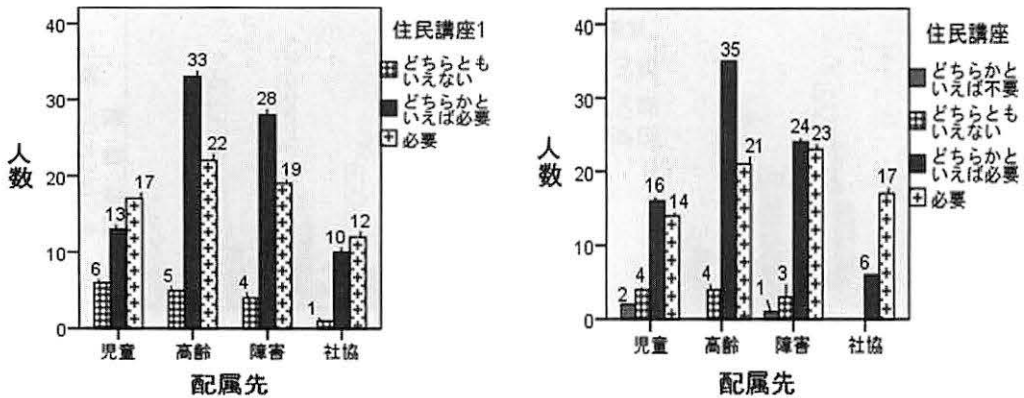


図 1-12 ⑫生活型支援からの退所準備

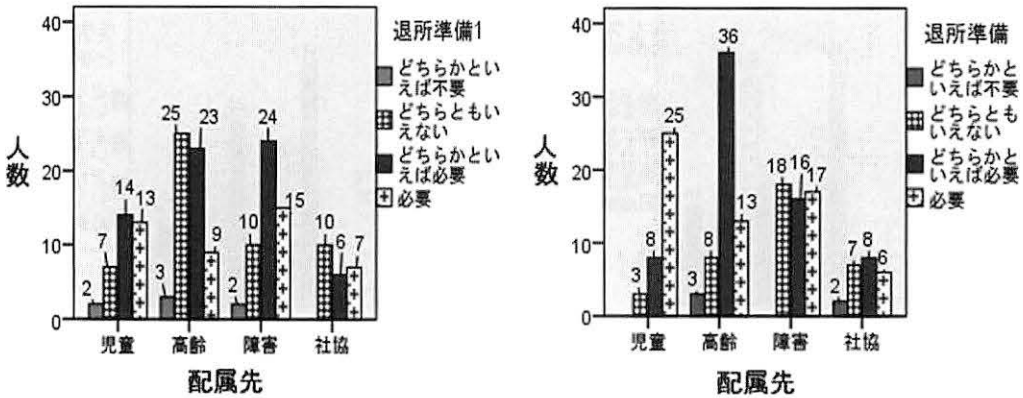
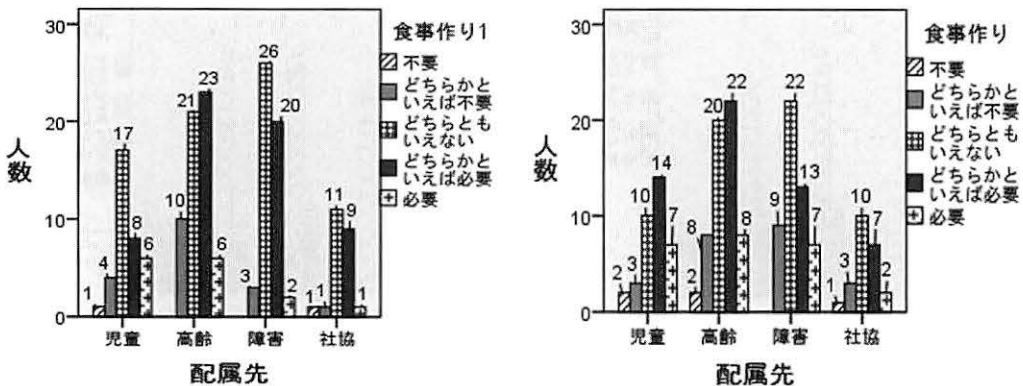


図 1-13 ⑬毎日の対象者への食事づくり



化なしである。

⑭(図 1-14) 全体的に若干必要度が増している。
〈ソーシャルワークの理解〉

「実習を通じて、ソーシャルワークについて理解することができましたか」の質問に対しては、児童で 80.6%，高齢で 85.0%，障害で 80.4%，社

協で 78.3% の学生が「少しは理解できた」「よく理解できた」としているが、各々 19.4%，15.0%，19.6%，21.7% が「どちらともいえない」「あまり理解できなかった」（高齢で 1 名のみ）と回答している。

図 1-14 ⑭対象者へのインテーク面接をする

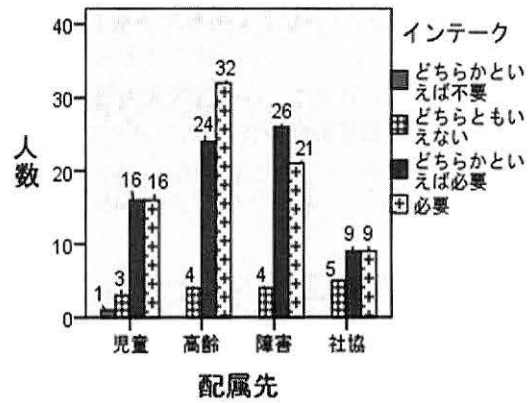
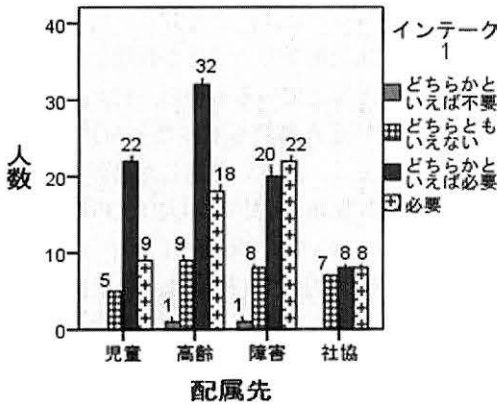


図 2-1 実習先が利用者に対してどのような役割を果たしているかの理解

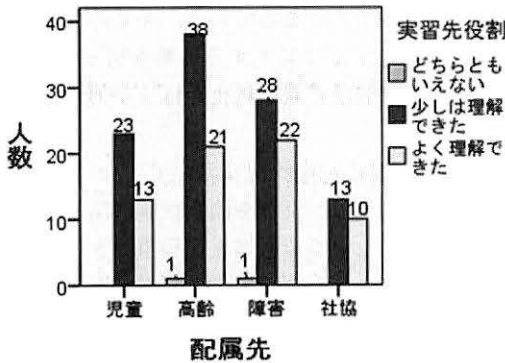


図 2-3 実習先に影響している社会福祉制度や仕組みの理解

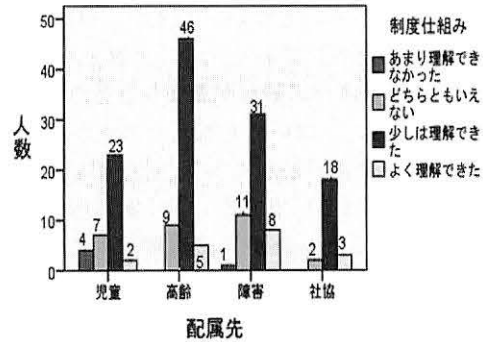
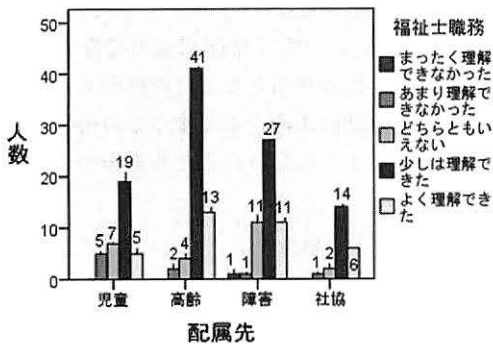


図 2-2 実習先の社会福祉士職務についての理解



〈ソーシャルワーク理解に役立ったことについて (自由記述)〉

170 人中 98 人が回答している。実習の展開として、1「読ませる」→2「話す・説明する」→3「示す・やって見せる」→4「させてみる」→5「問う・確認する」という順序で実習がすすめられるようになっている⁽⁷⁾。学生が挙げた理解に役

に立ったことをこれらに当てはめた場合、3「示す・やって見せる」に該当する回答が大多数であった。具体的には、指導者の面接や家庭訪問に同行、ケースカンファレンスの同行、職員と利用児者とのやりとりの観察であった。また4「させてみる」の該当するものとして数は少なかったが、支援計画の作成や利用児者とのコミュニケーション（会話や簡単な介助など）であった。

2) 実習での学び

①「実習先が、利用者に対してどのような役割を果たしているか理解できましたか」の問いに対して、図 2-1 の通り、2 人（高齢 1 人・障害 1 人）以外、「少しは理解できた」102 人（60%）「よく理解できた」66 人（38.8%）と回答している。分野別に顕著な違いはなかった。

②「実習先の社会福祉士の職務について、理解できましたか」の問いに対して、図 2-2 のような

結果となった。おおむね理解はすすんだようだが、児童分野で若干「あまり理解できなかった」「どちらともいえない」、障害分野で「どちらともいえない」の数が目立つ。③「実習先の運営に影響している社会福祉制度や仕組みについて理解できましたか」の問いに対して、図 2-3 のような結果となった。

3) 実習先での人間関係

「実習指導者」及び「利用者」との関係を聞いたところそれぞれ、以下のような回答であった。①「実習先の利用児者とよい関係がもてましたか」の質問に対して、「はい」と答えた学生が 145 人 (85.3%)、「いいえ」と答えた学生が 2 人 (1.2%)、「どちらともいえない」が 22 人 (12.9%)、無回答 1 名 (0.6%) である。②「実習を通じて、実習先の利用児者への理解が深まりましたか」の質問に対しては、「はい」と答えた学生が 158 人 (92.9%)、「いいえ」がなく、「どちらともいえない」が 12 人 (7.1%) である。③「実習指導者とよい関係がもてましたか」の質問に対しては、「はい」と答えた学生が 141 人 (82.9%)、「いいえ」と答えた学生が 6 人 (3.5%)、「どちらともいえない」が 23 人 (13.5%) である。

実習前アンケートでは、不安に感じる内容として、利用児者や指導者等とのかかわりを心配する回答が目立った。しかし上記の通り 8 割以上が利用児者・指導者とよい関係が保てたと答えている。少数ながら利用児者や指導者とのよい関係が保てなかった学生も存在することは留意が必要で

ある。

上記で、比較的多くの学生が利用児者とよい関係が保てたと答えているものの、124 人 (72.9%) もの学生が戸惑う場面もあったと回答している。配属分野別では、戸惑いを感じた場面があったと答えたのは、児童 36 人中 30 人 (83.3%)、高齢 60 人中 47 人 (78.3%)、障害 51 人中 39 人 (76.5%)、であるのに比べ、社協は、利用児者と直接関わることが少ないためか、他の分野に比べて戸惑いを感じたのは 23 人中、8 人 (34.8%) と低い割合を示した。さらにその対処法については、図 3 の通り、「実習指導者や職員に聞いた」が一番多く、その次には「その利用者と積極的に関わったり話してみた」となっている。多くの学生は実習施設の中ですぐに対処する姿勢を持っており、いくつかの対処法で乗り越えた様子が伺える。

4) 実習指導室の利用状況について

実習指導室では、実習や国家試験に関わる資料や文献を常備しつつも学生が利用できるようにしている。しかしながら実際の利用状況を質問したところ、図 4 のような結果となった。実習生であれば全員が利用するであろうと思われた「施設パンフの閲覧」は半数以下の 81 人であること、なら「利用したことがない」が 39 人もいたことが明らかになった。「卒研卒論の閲覧」は 3 人であるが、今後の利用となる可能性がある。インターネットなどによる検索ですべての情報を得ることができるようになったことも要因のひとつで

図 3 利用児者とのかかわりで戸惑ったときの対処法

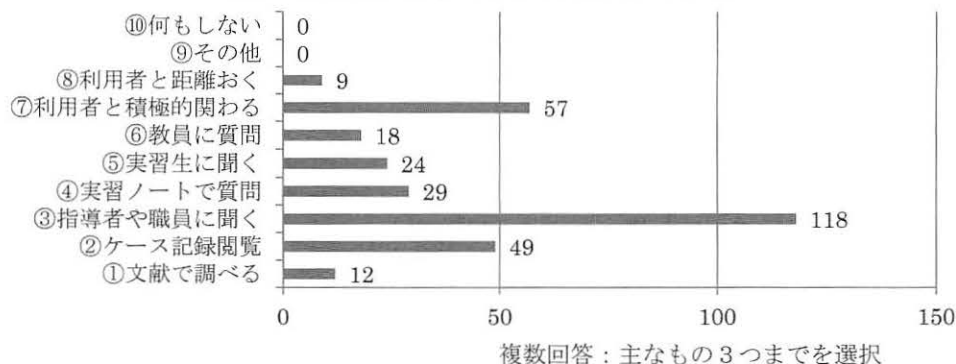


図4 実習指導室の利用状況

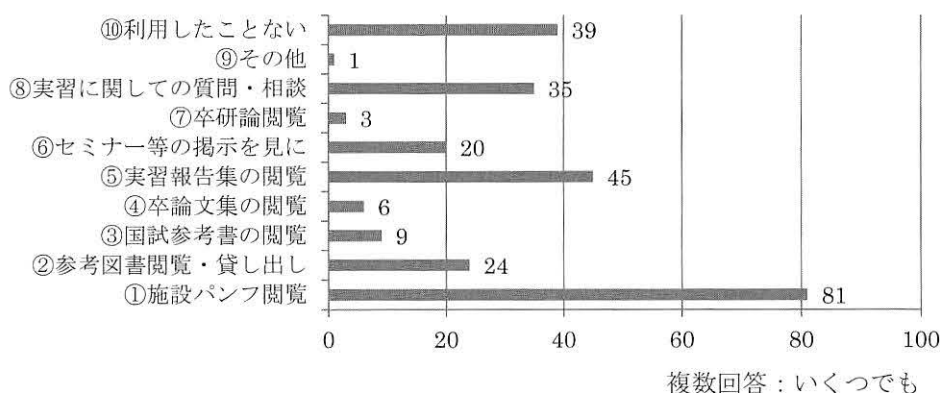
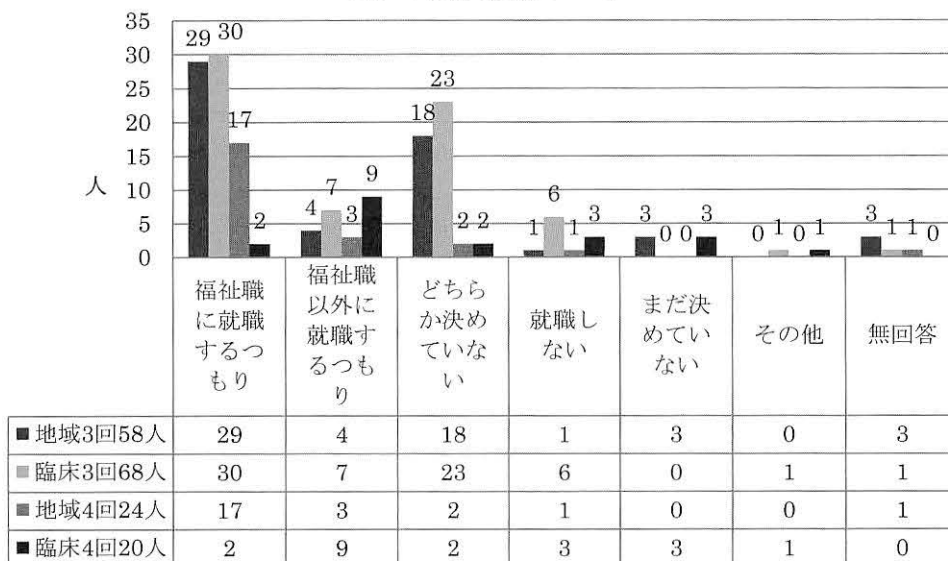


図5 卒業後の進路について



あろう。今後、実習指導室の環境づくりや資料収集・情報発信方法などいくつかの改善・工夫が必要であると考ええる。

5) 実習全般を振り返って（実習前中後の反省点と評価点）

紙幅の都合上この項目に関しては、概観のみにとどめる。実習前については、「法律・制度の勉強」「利用児者の勉強」「地域特性を調べる」などの事前学習についての反省点が多く見られた。実習中に関しては「積極的な態度」「積極的な質問」をすればよかったと反省している点と、評価できる点としては「個別支援計画を作成できたこと」

「疑問点などはすぐ解消した」「積極的な態度で臨めた」「多くの行事に参加できた」など積極的な態度と体験の多さを評価する点に特徴がみられた。実習後の反省点に関しては、記録等に関することが多く、「まとめをしておけばよかった」「振り返りを早めにすればよかった」など、評価点としては「まとめ・振り返りができた」とことと「他の実習生の話が聞けた」ことなどが目立った。実習後にアルバイトやボランティアに参加したことを評価できる点としてあげている学生もいた。

6) 卒業後の進路

実習前同様、進路選択についての質問をした

表1 各分野の進路変化の内訳

(％は最上段の人数を母数としている)

	児童 36 人	高齢 60 人	障害 51 人	社協 23 人	合計 170 人
福祉職希望以外の選択から福祉職希望へ変化*1	6 人 16.7%	4 人 6.7%	2 人 3.9%	1 人 4.3%	13 人 7.6%
福祉職希望から福祉職希望以外の選択へ変化(*2)	4 人 11.1%	8 人 13.3%	5 人 9.8%	1 人 4.3%	18 人 10.6%
その他の変化(*3)	2 人 5.6%	11 人 18.3%	7 人 13.7%	4 人 17.4%	24 人(*4) 14.1%
進路が変化した学生 計	12 人 33.3%	23 人 38.3%	14 人 27.5%	6 人 26.1%	55 人 32.4%
進路が変化しなかった学生 計	24 人 66.7%	37 人 61.7%	37 人 72.5%	17 人 73.9%	115 人 67.6%

*1 福祉職希望以外の選択から「福祉職に就きたい（決まっている）と考えている」へ変化した学生

*2 「福祉職に就きたい（決まっている）と考えている」から福祉職希望以外の選択へ変化した学生

*3 実習前後とも「福祉職に就きたい（決まっている）と考えている」を選択していないが、何らかの進路変更があった学生

*4 24 人の内 7 人は、実習前には「福祉職以外」としていたが実習後は「どちらか迷っている」とし、反対に 5 人が「どちらか迷っている」から「福祉職以外」へ変化した。それ以外は進学や就職そのものを迷っている学生である。

が、その回答が図 5、実習前との変化を示したものが表 1 である。全体の 32.4％は、実習前後で進路希望に何らかの変化が見られた。「福祉職就職希望以外⁽⁸⁾」から「福祉職就職希望⁽⁹⁾」へと変化した学生は 13 人（全体の 7.6％）、さらにそれぞれの分野別で見ると児童 36 人のうち 6 人（16.7％）が他の分野に比べて多い結果となっている。一方、「福祉職就職希望」から「福祉職就職希望以外」へ変化した学生は 18 人（全体の 10.6％）存在⁽¹⁰⁾し、特に高齢で 60 人中 8 人（13.3％）と他の分野より若干高めになっている。また実習前で福祉職を希望しておらず、今回のアンケートでも希望していないが何らかの進路変化があった学生は、全体の 24 人（14.1％）みられた。この 24 人の内 7 人（高齢 4 人・障害 2 人・社協 1 人）は、実習前には「福祉職就職希望以外」としていたが実習後は「どちらか迷っている」としていることから福祉職への就職も視野に入れたと推測された。反対に 5 人（児童・高齢・社協各 1 人・障害 2 人）は「どちらか迷っている」からはっきりと「福祉職就職希望以外」へ変

化した。以上の数を加えれば、福祉職へ関心が向かった学生が全部で 20 人、反対に福祉職への関心が低くなった学生が 23 人ということになり、福祉職へ関心が高まる方向へ変化した学生と、関心が低くなった学生が同程度存在することが数字で示された。

進路希望が実習前後で変化した要因が、実習だけによるとは言い難いが、実習参加の影響は大きいと考える。

3. 考 察

筆者が実習指導室の実習助手であり、社会福祉士であるという立場から、全体を通して、以下三つの点について考察をすることとする。

1) 実践知と理論知の間の気づき

14 項目について、「ソーシャルワークを実施する上でどの程度必要だと思いますか」に対する回答については、全体としては実習前後の回答に変化なしの学生が多かったものの、分野や項目により多少の特徴がみられたと言える。例えば児童

分野では、子どもとの生活体験をする実習が多いためか、家事援助や退所準備の必要度が増す傾向がある。特に退所準備には、児童分野では「必要である」の割合が高くなり、高齢分野でも「必要である」「どちらかといえば必要である」の割合が高くなった。これらの分野は入所施設が多いため、他の分野に比べて顕著な違いがみられたのだと思われる。退所準備の中には単に送り出す準備だけではなく、自宅や他施設への支援の連続性を担保するためにソーシャルワークによる支援が重要となる項目である。このような有り様を現場で体験することにより実感があったのではないかと推察される。また、同じ分野であってもその内訳をみると必要度が増す学生と減少する学生がいることから、個々の施設の実践方法や指導者や利用児者との関係性から、少なからず影響を受けたものと考えられる。

久保（2010）⁽¹¹⁾はソーシャルワーク教育課程の展開の中で、講義・演習・実習の関係を「理論知を得る講義、実習への橋渡しとなる演習、そして第3ステップである実習」とし、実習は「理論の実践化の段階であるが、その学びは、各論、つまり、特定の課題のスペシフィックな実践をとおしてである」としている。そして久保（2010）は次のように続けている。「現場実習では、理論知、すなわち、形式知＝言語化された知ではない知に出会う」と述べられている。前述のように、実習前に比べて実習後のソーシャルワークに関する意識が変化したものこうした「理論知、すなわち、形式知＝言語化された知ではない知」との出会いを意味する。特に実習直後、学生は、実践知と理論知の間で流動的な思考の中にいるのではないと思われる。「理解できなかった」「理解した（厳密に言えば、理解したと思っている）」ことが、スーパービジョンや他の実習生との共有・記録の振り返り・事後学習等の中で、さらなる気づきとなっていくのであろう。

2) 人間関係から学ぶこと

実習前では自らのケア体験でかかわった分野を希望する傾向が見られた⁽¹²⁾。知ることは、利用児者に関心を持つこととなり、実習分野選択の動

機につながった学生も多かったと推測できる。また実習前のアンケートでは、実習に対してほとんどの学生が不安を持っていた。特に利用児者とのかかわりや実習指導者との関係を心配する内容が多かったが、実習後は比較的多くの学生が、利用児者や実習指導者との関係は良好なものであったと回答している。良好であったものの、全体の72.9%は利用児者に関わる中でも戸惑いを感じたこともあったとし、いくつかの対処方法をとっている。これらの方法は実際の支援の際にはアセスメントの方法として読み替えることも可能である。理解できず戸惑い、何らかの情報を得るために動くことは、ソーシャルワークのアセスメントに近い体験をしたことと思われる。さらに自由記述では「もっと積極的に利用児者にかかわればよかった」「もっと指導者に積極的に質問すればよかった」という記述が多く、良好な関係の中であってもう一歩が難しかったようである。あるいは良好な関係を保つための遠慮もあったのかもしれない。

実習中の関係は、「利用児者」「実習指導者」「実習生」「実習指導教員」の4者関係からなっている⁽¹³⁾といわれる。利用児者を理解するには、利用児者と実習生の直接的なかかわりのほか、「利用児者－職員」「利用児者－利用児者」「利用児者－家族」「利用児者－ボランティアの方など」等様々な関係をも包含しての理解となる。理解が深まると同時に、単に「聞く→知る」ことだけではとどまらない本当の意味での利用児者とのかかわりの深さを感じ取ったのではないだろうか。また、ソーシャルワーク理解はその項目による実践（たとえばケースカンファレンスや支援計画など）だけでなく、このような様々な関係性⁽¹⁴⁾から理解する要素も非常に大きいこと、さらに実習前の不安な対象から良好な関係への変化は、ソーシャルワーカーが利用児者との出会いから支援課程で感じる変化と同様の体験であったことが推察できる。

3) 自己の気づきへの手がかりとしての実習

進路については、全体の3割程度は、実習前後に何らかの変化があり、実習が要因の一つである

と考えられる。変化の理由までは問うことはしていないが、3年生4年生という時期では、当然進路の迷いもあり、決定するための材料を模索している時期ともいえる。今回のアンケートでは前述したように、福祉職希望へ変化した学生と福祉職以外希望へ変化した学生が同程度いた。福祉かそれ以外か、つまりあれかこれかの二者択一になりがちではあるが、福祉現場を職業として選択しないにしても、社会福祉を学んだ意義に気づきそれを仕事の中でどう活かしていくのが明確になることが必要である。その意味で実習は、社会のなかの自己について気づきができる機会でもある。

また、上記のような気づきから今後の学習、職業選択へと有意義につなげていくためには、より豊かな情報が必要であろう。昨今インターネットの普及により、いつでもどこでも情報を得ることが可能になった。しかし、情報を複合化して得ることは容易ではない。実習を通して情報を得たり、相談したりする力はひいてはソーシャルワーカーとして社会人として情報を得たり人的資源をうまく活用する力の基礎となるものである。本学では、実習に関する資料・文献などの情報提供や実務を行う場として、実習指導室がその役割を担っているが、アンケートの結果では思いのほか利用していないことがわかった。情報そのものだけではなく、人とのやり取りの中で情報を得る場として、実習指導室のあり方も今後の課題である。上記の考察を踏まえ学生の自己の「気づき」を促す手助けという視点で、実習前や実習中だけにとどまらず実習後にかかわっても、提供する情報内容や方法などを、他課との連携を視野に考えていきたい。

4) まとめと残された課題

以上からまとめると、まず1点目は、さまざまな体験により理解感は深まったものの、スペシフィックな実践のために同じ援助であってもその捉え方に差が出たといえる。実習後は「スペシフィックな実践をジェネリックな視点へと転換する作業⁽¹⁵⁾」でもあると言われるが、その意味では実習直後では差が出ているのは当然の結果であったと言える。それゆえ、実習を終えた以降も、理解

できたこともできなかったことも様々に発展する可能性を秘めていると言える。2点目は、学びの中には人間関係が大きな要素となることである。個別の実習メニューを体験することだけによる学びだけでなく、関係性を築く作業そのものがソーシャルワーク課程のひとつを体験したと言える。3点目は、実習前・中だけでなく、実習後にも豊かな情報が必要であるということである。特に進路に向けては、実習での体験だけが判断材料になることがないように多角的な情報を得ることが必要である。

今回のアンケートでは、あくまで学生の感覚による理解感や実習前後の相対的な比較にとどまり、客観的な変化を表すことはできなかった。また実習分野により若干のちがひがあると推測できるにとどまり、何が違うかを導き出すには至っていない。分野や施設形態の違いによる実習内容の相違を明確にすることができれば、「スペシフィックな実践をジェネリックな視点へと転換」あるいはその逆の転換をする際の一助となると考えられる。

おわりに

以上のように、学生がどのように変化し、その変化はどのような意味を持つのかの関心に基づき考察してきたが、推測の域を出ない論考であることは否めない。しかし実習を通して、学生は実習体験という枠組みを超えて、さまざまな影響を受けていることは明らかである。また実習中には気が付かなかったことも、振り返りや後々の授業の中で、点と点がつながるように新たな気づきが訪れていると思われる。そして忘れてはならないのが、学生が実習先の利用児者・職員の方々へ何らかの影響を与えていることである。些細な言動が様々な形で交互作用し、その作用は実習後の今もなおその現場において続いているかもしれないのである。実習が現場にとっても学生にとっても単なる体験ではないということをあらためて自覚するとともに、今後は前述の課題について研究を深めていきたいと考える。

本稿は、文部科学省科学研究費 基礎研究 (C) 研究代表者：土田美世子「生活型福祉施設

のケアワーク構造とソーシャルワーク（課題番号 25380806）」に関連する実習生に対するアンケート調査のうち、「実習前アンケート調査」「実習後アンケート調査」の一部を論文にしたものである。

注

- (1) 「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見（平成 18 年 12 月 12 日社会保障審議会福祉部会）」において社会福祉士に求められる役割として①福祉課題を抱えた者からの相談に応じ、必要に応じてサービス利用を支援するなど、その解決を自ら支援する役割、②利用者がその有する能力に応じて、尊厳を持った自立生活を営むことができるよう、関係する様々な専門職や事業者、ボランティア等との連携を図り、自ら解決することのできない課題については当該担当者への橋渡しを行い、総合的かつ包括的に援助していく役割、③地域の福祉課題の把握や社会資源の調整・開発、ネットワークの形成を図るなど、地域福祉の増進に働きかける役割が提示された。
- (2) 「社会福祉士及び介護福祉士法」（昭和六十二年五月二十六日法律第三十号）第一章総則第二条 この法律において「社会福祉士」とは、第二十八条の登録を受け、社会福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもつて、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者（第四十七条において「福祉サービス関係者等」という。）との連絡及び調整その他の援助を行うこと（第七条及び第四十七条の二において「相談援助」という。）を業とする者をいう。
- (3) 龍谷大学 社会学部 地域福祉学科・臨床福祉学科における、3 回生以上の学生
- (4) 2013 年 9 月 18 日、実習前オリエンテーション時に「実習前アンケート」を行った。
- (5) 2013 年 11 月 27 日、2012 年度に相談援助実習に行った学生 10 名より事前インタビューを行った。各分野で、実習内容や学生の思いに若干の差異がみられた。
- (6) 5 つの選択肢で実習前後に変化がないものは 0 とし、必要度の増減を数値に表しグラフ化した

（紙幅の都合上省略している）。例えば実習前に「2 どちらかといえば不要」を選択し、実習後「4 どちらかといえば必要」を選択した場合、変化は 2 とし、その逆であれば変化は -2 と算出した。

- (7) 社団法人 日本社会福祉士会（2011）『社会福祉士実習指導者テキスト』中央法規出版 p 263
- (8) アンケートにおいて、問 8・1）で「就職しない」「卒業後のことはまだ決めていない」「その他」を選択または「就職したいと考えている」を選択したが下段で「福祉職以外に就きたいと考えている」「どちらか決めていない」のいずれかを選択した 3 回生、および問 8・2）で「進学を考えている」「卒業後のことはまだ決めていない」「その他」を選択または「福祉職に決まっているまたは就きたいと考えている」を選択したが、下段で「福祉職以外に決まっているまたは就きたいと考えている」「どちらか決めていない」を選択した 4 回生である。
- (9) アンケートにおいて問 8・1）で「就職したいと考えている」を選択しかつ下段で「福祉職に就きたいと考えている」と選択した 3 回生、および問 8・2）で「就職が決まっている」または「就職活動中である」を選択しかつ「福祉職に決まっているまたは就きたいと考えている」を選択した 4 回生である。
- (10) 川上富雄（2012）は、一定数の学生が養成校での学びと実習先で見聞したこととの乖離に多くのジレンマを抱えたことで、現場実践等に失望し社会福祉士になることをあきらめてしまうことがあると説明し、これを「実習生の逆機能問題」としている。「社会福祉士制度改正後の相談援助実習の課題と展望」『駒澤大学文学部紀要』駒澤大学 pp 152～154
- (11) 久保美紀（2010）「第 13 章ソーシャルワークにおける教授法－総論・各論の教授法－」「ソーシャルワークの研究手法－実践の科学化と理論化を目指して－」相川書房 p 233
- (12) 児童希望者 54 名の内児童ケア体験 33 名、高齢希望者 58 名の内高齢ケア体験 46 名、障害希望者 45 名の内障害ケア体験 17 名と、それぞれ他のケア体験に比べて同じ分野のケア体験が多かった。社協に関しては、児童ケア体験・高齢ケア体験・障害ケア体験それぞれ同程度であり差はなかった。
- (13) 社団法人 日本社会福祉士会（2011）『社会福祉士実習指導者テキスト』中央法規出版 p 35
- (14) 現在ではどの分野においてもチームアプローチ

すなわち協働による支援が主流であり、利用児者とともに各専門職・関係機関との関係性の中で支援を展開することが多くなる。

- (15) 社会福祉士は、ジェネラリストの視点が求められる。しかし実習施設・機関で教授するのは「スペシフィック」なソーシャルワークとなることが予想されるので、実習後指導においては「ジェネラリスト」視点への転換が必要であるとされる。社団法人日本社会福祉士養成校協会（2012）相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版 p81

参考文献

- 社団法人 日本社会福祉士会（2011）『社会福祉士実習指導者テキスト』中央法規出版
- 川上富雄（2012）「社会福祉士制度改正後の相談援助実習の課題と展望」『駒澤大学文学部紀要』駒澤大学
- 久保美紀（2010）「第13章ソーシャルワークにおける教授法－総論・各論の教授法－」『ソーシャルワークの研究－実践の科学化と理論化を目指して－』相川書房
- 社団法人日本社会福祉士養成校協会（2012）『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版